

写真のリアリティ再考 : 写真の観賞における「現実」の性質と位置付け

江本, 紫織

<https://hdl.handle.net/2324/4474900>

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)

氏 名	江本 紫織			
論 文 名	写真のリアリティ再考 -写真の観賞における「現実」の性質と位置付け-			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	東口 豊
	副 査	九州大学	准教授	石井 祐子
	副 査	九州大学	教授	倉田 剛
	副 査	近畿大学	教授	前川 修

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、写真機材の技術革新や IT の発展に伴ってその有り様が大きく変わりつつある様に見える状況において、写真の観賞を通して得られるリアリティとは何かについて再考し、写真経験の構造を総合的に理論化しようと試みたものである。

従来写真に関しては、フィルム写真に特有な化学的因果関係を基に主要な議論が構築されて来た。パースが指摘するインデックス性、バルトが言う「コードのないメッセージ」、ウォルトンの「透明性テーゼ」等は、皆それを立脚点とする迫真性や客観性、被写体との外観の一致を様々な角度から言い表したものであった。現在、その様な撮影プロセスにおける理論的根拠がデジタル化以降失われ、また SNS 等の登場によって写真の利用場面が急速に拡大したことに伴い、従来の写真論が適用出来ない事例が生じて来ている。しかし、本論文ではそれを現代の写真状況に限定するのではなく、現代の写真に現れた特徴の中に、これまで見過ごされて来た写真の可能性が顕在化していると捉えるのである。

その際本論文が出発点とするのは、写真の生成プロセスでも写真が提示される文脈でもなく、観賞のあり方である。まず写真観賞のタイプを観賞者の関心や態度に即して分類し、そこから写真観賞における時間性と空間性の問題を抽出する。写真には撮影時の時間的・空間的部分が記録されているのは間違いない。但し、観賞者は観賞時点の「いま-ここ」や撮影時点の「かつて-そこ」を常に意識する訳ではなく、写真の種類や撮影者の意図から、バルトやド・デュージュが主張する「かつて」「そこ」「今」「ここ」間の「非論理的結合」を一義的に受け入れているのでもない。また、Instagram 上でハッシュタグや位置情報等によって検索される観賞形態からは、撮影された場所に必ずしも依拠しない空間性が導き出される。つまり、観賞者は観賞タイプによる違いはあれ、撮影された現実とは異なる拡張された時間や仮想的な空間をイメージ化しながら観賞していると分析するのである。この様に、観賞において様々な時間や空間を担いつつイメージされる表象を、本論文では「再構成された現実」と規定する。そして写真から受け取るリアリティは、写真の描写内容や生成プロセスの中で入り込む虚構性等に起因されるのではなく、「再構成された現実」と撮影された現実や観賞者を取り巻く物理的現実との重層的な関係の中で形作られると本論文は主張する。

更に本論文では、通常終着点と見做される写真の観賞を、次の写真プロセスに一時的なコンテクストとして作用し、循環する一つのシステムを創出する役割を担うものとして提示する。これは写真イメージのみならず、写真をめぐる技術や環境、付随するテキスト、観賞者の記憶等が結節点としての写真に集約され、またその様な写真が集合して「総体としての写真」の経験をもたらしてい

るという事態を的確に言い表していると思われる。

この様な写真の包括的な理論を構築するために、本論文では古典的写真論から、構造主義やポストモダンの写真論、分析美学、メディア論など極めて多岐に亘る議論を参照している。それは、虚構と現実、撮影と観賞、アナログとデジタル等の様々な二元論を解体し、様々な要素との諸関連の中で写真の有り様を語るために必要なことではあるが、それぞれが異なる立場や目的に沿ってなされた議論を、写真のリアリティという問題の内に新しい光を当てながら自家薬籠中のものにする本論文の構成にはある種の感嘆を禁じ得ないものがある。以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに十分な能力を持つことを認めるものである。